様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：３４５０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０３８３７

研究課題名（和文）リスクマネジャーとしての近江商人の研究

研究課題名（英文）Research on Ohmi Merchants as Risk Managers

研究代表者
前田　祐治（MAEDA, Yuji）

関西学院大学・経営戦略研究科・教授

研究者番号：７０４５６７４７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：近江商人、アラブ商人、リバプール商人ともに海上輸送を中心にした商業によって、消費都市と生産地域を相互的に発展させていた点での役割は非常に類似している。海上輸送はその時代木造の帆船であり難破による貨物損害、人的損害のリスクは大きかった。アラブ商人、リバプール商人はそれらのリスクに対し、一般の人々からリスク引受人を募る方法で後の海上保険システムを形成していった。一方、近江商人は海上輸送の様々なリスクに対して、輸送経路を「分散」させる方法をとるとともに、万が一の際損害に対して相互扶助的な「リスクプールシステム」を形成した。このリスクプールは現在の「保険プール」へと繋がる画期的なシステムである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究目的を達成するために、リスクマネジメント論、リスク経済論、保険論、経営論、近江商人経営論など従来型縦割り体制ではなく、横断的な研究体制で課題達成を試みた点で学術的意義は大きい。
　本研究成果の一つに、近江商人と現在の保険との歴史的なつながりを解明することができた点がある。近江商人と同時代のアラブ商人、リバプール商人のリスクマネジメントの役割について解明できたことは学術的に大きな貢献である。二つめは、近江商人のような起業経営者によるリスクへの対応を探求することで現在のリスクマネジメントの課題への解答に示唆を与えることができたと考えている。

研究成果の概要（英文）：Ohmi Merchants had a particular role of connecting and developing the regional economies of both in consumption cities and production cities in Japan, the role similar to Arabian Merchants and Liverpool Merchants in the same time periods. Transportation of goods by sea shipment had high risk of losing people and damaging goods during transportation because the wind driven wooden boats were susceptible to tidal waves on sea. Subject to this risk, Ohmi Merchants decided to diversify the risk by changing the routes of shipment and also forming the system of "Risk Pooling" so that the merchants were mutually helping for the loss of damage. This is very different from the Arabian Merchants and Liverpool Merchants who developed a system in which the risks are transferred to general people as insurance underwriters.
The risk pooling system developed by Ohmi Merchants had big influence on the insurance system in Japan.

研究分野：リスクマネジメント

キーワード：リスクマネジャー　近江商人　リスクマネジメント　保険

1．研究開始当初の背景

我々は 2008 年のリーマンショック以降、50 年または 100 年に一度といわれる世界的経済停滞に直面している。さらにトマ・ピケティの大著『21 世紀の資本』が教示するのは、所得格差、資産格差、地域格差、教育格差など、種々の格差はますます拡大傾向にある。この変化の激しい社会に対処するために、経営者は新しい企業経営形態や今までとは違ったリスク管理が求められている。今日「温故知新」の精神に則って、「リスクマネジャー」としての近江商人道を現代に生かす道が必要なのではないだろうか。

リーマンショックの危機は、個人・企業・国家そして世界に対して、「短期的・金銭的な利益」が「長期的・人間的な利益」よりも優先されるような価値観・行動様式を考え直すことを求めている。「人間の心」を失った経営方式の問題点は、日本のみならず、アメリカにおいても指摘されつつある。たとえば、最近マイケル・ポーター教授（ハーヴァード大学）は、「共有価値の創造」(creating shared value)という考え方を唱道しようとしている。また、企業の「社会的責任」が重要視され、多くの企業が CSR 活動を啓蒙し活動している。これらは「売手よし、買手よし、世間よし」という、近江商人の「三方よし」の精神に通じるものである。まさに危機を通じて欧米と日本企業が同じ方向性を模索しているのである。

従来、日本と欧米の企業間にはリスク管理に関する考え方に大きな違いがあった。前田(2015)や Skipper（2007）などの研究から、欧米企業では「リスクマネジャー」と呼ばれる専門職が組織内で確立し、1980 年代の保険管理から発展させ、統合的リスクマネジメントを行っている。この経営管理は個々の企業が直面するリスクに合致した独自の対策をとることができ、合理的なアプローチといえよう。一方、日本企業ではリスクマネジャーは専門職としては存在せず、多くの場合総務課に保険担当者が存在し保険管理のみを行っている。これは一見リスク管理を主体的に行うものに見えない。

現代の経営戦略としてのリスクマネジメントに関しては、曽根・前田（2013）が「経営戦略型リスクマネジメントを通じた組織の存続」において竹中工務店の内部競争の事例を中心にリスク管理を戦略論と捉えて議論している。そこでは欧米型リスクマネジャーの役割の代替として過度なリスクを抑えるため様々な制度が組織内で内包されていることを解明した。近代的保険とリスクマネジメントに関しては、酒井（2007）が「リスクと保険文化」において、近世日本の商業貿易活動（たとえば蝦夷地との貿易）では「振分散」という相互扶助的な保険システムが独自に考案・活用されており、それは近江商人の活動に顕著にみられる非常に利口で有効なリスクシェアリング・システムであったと論じている。

実際、近江商人の経営史を詳細にたどるとリスク分散に注意を払ったさまざまな工夫がされていたことが判明している。たとえば上村（2005）は「近江商人の経営と危険分散」のなかで、近江商人は、多店舗化、多業種化、店名前、分家・別家による血のスペア、諫言、開業の制約、経営委託、合議制、裁量権の制約、意識上の束縛、店廻り、帳簿組織など様々なリスク分散のための工夫がなされていることが確認されると論じている。さらに近江商人の場合は、このリスク管理手法を近世社会の中で成熟させ、さらに近世的な合理性を極度に高めていったところに特徴があったと結論づけている。

これらの研究により、近江商人の経営手法と欧米の経営手法が「リスク管理」の点で非常に似ていることが示唆される。そこで本研究により、近江商人をリスクの視点から探求することで現代の危機に立ち向かう日本経営のあるべきリスク管理の姿を解明しようと考えている。

2．研究の目的

本研究では、江戸時代に活躍した近江商人の「売手よし、買手よし、世間よし」という「三方よし」の精神と欧米発の「リスクマネジャー」の考え方がどの程度類似しており、どの点で決定的に違うのかを見極める。また、現代のリスクマネジメント論の視点から、市場流通経済における近江商人の役割と課題を総合的に探究することにより、リスク社会を生き抜く日本企業のリスクマネジャーはどうあるべきかを解明する。本命題を達成するために、日米欧の企業訪問（フィールド調査、インタビュー等）、近江商人の古文書調査と事例の比較分析を同時に行うことを計画している。

３．研究の方法

これまで少ないながらも行われてきた近江商人のリスク管理とその効果に関して、現代の日本企業が今後国際展開する際に提言となるような、学際的で統合した研究に発展させる。そのため、企業単位の調査から始めるボトムアップのアプローチで研究を始める。本手法では、近江商人のリスク管理とその危機の際の効果に関する研究と同時に、現代の日本企業に通じるものを抽出する作業を行う。さらに国際展開として、米国、英国、スウェーデン、フィンランドへの事例調査を行う。数多くの事例データを入手した後、トップダウンのアプローチでリスク管理に関して比較分析、一般化、理論化を行う。アウトプットとして、日米欧のリスク管理の似ている点、決定的に違う点、近江商人のリスク管理から学ぶ点を学会発表、論文と書籍を通じて社会に発信する。

４．研究成果

本研究の目的は、近江商人をリスクマネジャーとしての役割と意義、さらに同時代の欧米の商人、アラブ商人、リバプール商人などと比較しそのリスクマネジメントの役割の違いについて分析し考察を試みることであった。

分析結果として、近江商人、アラブ商人、リバプール商人ともに海上輸送を中心にした商業によって、消費都市と生産地域を相互的に発展させていた点での役割は非常に類似している。海上輸送はその時代木造の帆船であり難破による貨物損害、人的損害のリスクは大きかった。アラブ商人、リバプール商人はそれらのリスクに対し、一般の人々からリスク引受人を募る方法で後の海上保険システムを形成していった。

一方、近江商人は海上輸送の様々なリスクに対して、輸送経路を「分散」させる方法をとるとともに、万が一の際損害に対して相互扶助的な「リスクプールシステム」を形成していった。このリスクプールは現在の「保険プール」とシステム的に類似し、商業保険制度へと繋がる画期的なシステムであると認められる。

本研究成果として、リスク分散とリスクプールという２つの車輪でリスクマネジャーとしての役割を担った近江商人論を、アラブ商人とリバプール商人との比較論のなかで論じた論文を公表した。

さらに、リスクマネジャーとしての近江商人論から発展させた成果物として「現在の日本と欧米のリスクマネジメントの比較論」も派生的な成果として学会にて報告し、論文投稿をした。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　10　件）

1. 曽根秀一（2019）「企業のリスクマネジメント及び存続に関す準備的研究－老舗江州系企業を事例に」彦根論叢、pp 118-131.　（査読なし）
2. Yasuhiro Sakai (2018) “Liverpool Merchants versus Ohmi Merchants: How and Why They Dealt with Risk and Insurance Differently?” Asia Pacific Journal of Regional Science, pp 15-33.　（査読あり）
3. 上村雅洋（2018）「紀州藩家老三浦家文書（24）」和歌山大学紀州経済史分化史研究所紀要, pp 97-123.　（査読なし）
4. 前田祐治（2016）「リスクマネジャーによるキャプティブドミサイルの選択」ビジネス&アカウンティングレビュー　18巻, pp 1-18.　（査読なし）
5. 曽根秀一（2016）「老舗企業研究の変遷に関する準備的研究－家訓、家憲を中心に」静岡文化芸術大学研究紀要　17巻　pp 39-46.　（査読なし）
6. Yasuhiro Sakai (2016) “Information Exchange among Firms and Their Welfare,” Hikone Ronso, Vol 409, pp 34-47.　（査読なし）
7. Yasuhiro Sakai (2016) “Liverpool Merchants versus Ohmi Merchants: How and Why?,” CRR Discussion Paper No. A-19, pp 1-25.　（査読なし）
8. Yasuhiro Sakai (2016) “Frank H. Knight on Market Thinking: Reflections on the Logic,” CRR Discussion Paper No. A-22, pp 1-28.　（査読なし）
9. Yasuhiro Sakai (2016) “J.M. Keynes versus F.H. Knight on Uncertainty,” Evolutionary and Institutional Economics Review, Vo.13, pp 1-21.　（査読あり）
10. Yasuhiro Sakai (2016) “On Environmental Risk Management,” Socioeconomic Environmental Policies, Vol. 10, pp 429-445.　（査読あり）

〔学会発表〕（計　8　件）

1. 前田祐治（2019）「日米における企業リスクマネジメントの違い」日本保険学会関西部会, 神戸大学梅田キャンパス
2. Yasuhiro Sakai (2019) “Liverpool Merchants versus Ohmi Merchants,” Tsukuba International Conference, Tsukuba University
3. 曽根秀一（2018）「100年企業を中心に長生きする企業の条件」東京中小企業家同友会多摩協議会総会
4. 曽根秀一（2016）「相続優先のファミリーアントレプレナーシップのプロセス」組織学会年次大会、兵庫県立大学
5. 曽根秀一（2016）「ファミリーアントレプレナーシップにおける相続優先のガバナンス」ファミリービジネス学会、甲南大学
6. Yasuhiro Sakai (2016) “J.M. Keynes versus F.H. Knight; How to Deal with Risk,” International Keynes Conference, Hitotsubashi University
7. 酒井泰弘（2016）「リスクの経済学の研究と教育：現状と課題を考える」研究教育記念公園、兵庫県立大学
8. 酒井泰弘（2016）「リスクと不確実性の経済学：現状と課題」進化経済学会、京都大学

〔図書〕（計　2　件）

1. 曽根秀一（2019）「老舗企業の存続メカニズム－宮大工企業のビジネスシステム」中央経済社、255ページ
2. Yasuhiro Sakai (2019), ”J.M. Keynes versus F.H. Knight: Risk, Probability and Uncertainty” Springer Japanm, 197 pages

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：　酒井　泰弘

ローマ字氏名：　SAKAI, Yasuhiro

所属研究機関名：滋賀大学

部局名：経済学部

職名：名誉教授
研究者番号（8 桁）：40093760

研究分担者氏名：　曽根　秀一

ローマ字氏名：　SONE, Shuichi

所属研究機関名：静岡文化芸術大学

部局名：文化政策学部

職名：准教授
研究者番号（8 桁）：70634575

研究分担者氏名：　上村　雅洋

ローマ字氏名：UEMURA, Masahiro

所属研究機関名：和歌山大学

部局名：産業連携イノベーションセンター

職名：名誉教授
研究者番号（8 桁）：00151837

(2)研究協力者
研究協力者氏名：Nicos, Scordis
ローマ字氏名：Nicos, SCORDIS

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。